

鳥類標本ってなに?

鳥類標本は、死亡した鳥を長期間保存できる状態にしたものです。主に本剥製(ほんはくせい)と仮剥製(かりはくせい)という状態で保存します。

それでは、本剥製と仮剥製について順に紹介します。

本剥製

写真1が本剥製です。本剥製は、芸術作品のように精巧につくられた鳥の標本です。鳥の骨・筋肉・内臓を除去した後、腹部に綿や木材を詰め、針金で整形してつくります。目は、ガラスやプラスチック製の目玉です。一方、ツメやクチバシ、羽や体毛は、そのまま活用します。つまり、「本物」です。

本剥製の「出来栄え」は剥製師さんの腕次第です。その腕を競うコンクールなども開催されています。ちなみに、人と自然の博物館の本剥製は、国内トップレベルの剥製師さんの作品ばかりです。今回の収蔵資料展では、まるで生きている鳥のように見える作品を展示しますので、ぜひ、お楽しみください。



写真1: ハヤブサの本剥製



写真2: オオルリの仮剥製



写真3: モズの仮剥製の眼部



写真4: 人と自然の博物館で保存中の仮剥製



写真5: 国立台湾博物館で保存中の仮剥製

仮剥製

写真2が仮剥製です。仮剥製は、調査・研究に用いる特別な鳥類標本です。鳥の体の内部は、すべて綿に替えてあります。なんと、目も綿です(写真3)。調査・研究用の標本なので、とにかく簡潔につくられているのが特徴です。

調査・研究用の鳥類標本は、体長や翼開長などの計測に用いられます。そのため、すべて「同じ姿勢」に統一されています(写真4)。どの標本も仰向けで寝た状態です。もし仮剥製が様々な姿勢をしていたら、体長や翼開長を正確に測れないため、研究者はとても困ります。このような問題を未然に防ぐため、仮剥製はどれも同じ姿勢なのです。

ちなみに、世界中のほぼすべての博物館が、仮剥製を「仰向けで寝た姿勢」で保存しています(写真5)。この取り組みにより、仮剥製は国をまたいで比較できるようになり、鳥の研究が世界規模で発展する仕組みになっています。

なぜ、鳥を保存するの?

鳥類標本は、収蔵庫という特別な部屋で保存されます。光、温度変化、カビによる劣化などを防ぐため、部屋は真っ暗な上、温湿度は一年中、一定に保たれています(温度:約20℃、湿度:約50%)。

収蔵庫に保存することで、鳥類標本の劣化は飛躍的に減少します。写真6をご覧ください。左が収蔵庫で約100年間保存した標本、右が収蔵庫で約50年間保存した標本です。両方の標本を比較すると50年、100年経っても殆ど劣化していないことが良く分かります。

収蔵庫に収めた鳥の標本は、今後100年、200年・・・と、世代を超えて引き継がれます。100年、200年後の未来の科学技術で、鳥の標本はどのような研究に活用されるのでしょうか?想像するだけでワクワクしませんか?

このように未来の科学のために、鳥の標本を収蔵庫に収め、大切に保存しているのです。

今回の収蔵資料展では、芸術作品のように精巧につくられた本剥製をはじめ、調査・研究に用いる仮剥製など、様々な鳥の標本を特別に展示します。展示点数は約250点(予定)です。目にする事の少ない鳥類標本を、ぜひ、お楽しみください。

また、展示期間中には、研究員が参加者と一緒に見学しながら解説する「バックヤードツアー」や、この展示に関連したセミナーも開催予定です。ぜひ、ご参加ください。

布野 隆之(生態研究グループ)



写真6: 約100年間保存した標本(左)と約50年間保存した標本(右)